

当院 NICU で経験した trisomy 18 に関する検討

堤 信¹⁾²⁾ 太田 栄治¹⁾²⁾ 森井真理子¹⁾²⁾
瀬戸上貴資¹⁾²⁾ 橋口 千鶴¹⁾²⁾ 井上 真改¹⁾²⁾
木下竜太郎¹⁾²⁾ 中村 公紀¹⁾²⁾ 森 聡子¹⁾²⁾
廣瀬 伸一¹⁾²⁾

1) 福岡大学病院総合母子医療センター新生児部門

2) 福岡大学医学部小児科

要旨：2000年から2009年に当院 NICU で経験した trisomy 18 の14症例について後方視的に検討した。8例（57.1%）が出生前診断されており、4例（28.6%）が出生時の蘇生で気管挿管を要した。全例が不当軽量児で先天性心疾患を合併したが、心臓外科手術を施行された例はなかった。消化器外科疾患の合併は5例（35.7%）であり、このうち1例のみで根治術が施行された。NICU 入院中に10例（71.4%）が死亡しており、死亡日齢は0～504（中央値：156.5）であった。1年以上の生存率は35.7%であり、3例（21.4%）が在宅医療へ移行できた。今回の検討から、trisomy 18 であっても在宅医療の選択の余地があることが示唆された。今後、当院での trisomy 18 の管理方針として、児の病態と家族背景を熟慮し、可能な限り在宅医療を目指していく予定である。

キーワード：染色体異常, Edwards 症候群, 子宮内発育遅滞, 先天性心疾患